

巻頭説教

「被告席に立つ主イエス」

ヨハネによる福音書 18 章 15～27 節

牧 師 小野寺 泉

はじめに

今朝は、一緒にヨハネによる福音書 18 章 15～27 節を読みました。主イエスがゲッセマネの園でユダヤ当局に逮捕された後、祭司アンナスの屋敷へ連行され、そこで裁判をお受けになったという記事です。聖書に親しんでいる方は、主イエスは大祭司カイアフアの屋敷に連行され、そこで緊急の最高法院の会議が行われたのではなかったかと思うかもしれません。確かに共観福音書でありますマタイ・マルコ・ルカは、そのように告げています。

しかしヨハネ福音書は、そうしたことを承知の上で、大祭司カイアフアの屋敷にいる祭司アンナスのところに連行されたと告げています。それは何故でしょうか。13 節には、ユダヤ当局者たちが、主イエスを「まず、アンナスのところへ連れて行った。」とあります。そしてそれは「彼が、その年の大祭司カイアフアのしゅうとだったからである」というのです。つまりここで言われていることは、法的には、大祭司カイアフアのところに主イエスを連行すべきですが、その前に、まず彼のしゅうとである祭司アンナスを重んじ、彼の許へ連行したということではないのでしょうか。つまり「影の権力者」のような非公式な権力があることを明瞭にしているのです。ヨハネ福音書は、主イエスが、このいわば影の実力者とでもいうべきアンナスと対決なさり、それに勝利しておられる、というのです。

I

そこでこの箇所全体を眺めてみます。どなたもお気づきになることですが、主イエスとアンナスの記事は、19～24 節に記されています。その前の 15～18 節はシモン・ペトロがもう一人の弟子が大祭司の屋敷の庭に入ったことを告げています。また後の 25～27 節では、有名な「ペトロの否認」の記事です。ですから全体としては、主イエスとアンナスの記事を、シモン・ペトロの記事がサンドウィッチのように挟み込んでいる構造になっています。

そこで 19～24 節に注目しますと、主イエスはアンナスの尋問に対して実に雄弁であることが分かります。この主イエスの言葉がとても大切です。

アンナスは、主イエスに対して弟子たちのことや

教えについて尋ねています。これは、当時、エルサレムにある最高法院が、イスラエルの民の信仰について教化、導く責任があったためです。実際、洗礼者ヨハネが現れたときも、最高法院は人々を遣わして彼の信仰について調査しています(ヨハネ 1:19～22 参照)。それは、主イエスの時代に偽メシア運動が起こり、それが反ローマ運動と結びつき暴動になる危険があったためです(使徒 5:35～37)。そこでアンナスは、主イエスの教えがどういうものであり、それが弟子たちをどのように動かしているのかを厳しく主イエスに尋ねたのです。

それに対して主イエスは次のようにいうのです。

「わたしは、世に向かって公然と話した。わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂や神殿の境内で教えた。ひそかに話したことは何もない。なぜ、わたしを尋問するのか。」そのようにいっています。この主イエスの言葉は、すでに祭司アンナスを始め、最高法院を構成する他の祭司长、長老、律法学者に対する裁きを含んでいます。というのは、主イエスはここで、ユダヤ人が皆集まる場所で語ってきたが、あなたはた何も聞かなかったのか。あなたは他のユダヤ人と同じくわたしの下に集まって、わたしの話を聞いていなかったのか。そのような問いが含まれているからなのです。

こうしてここにおいてユダヤ最高法院は、主イエスを法廷に立たせ、裁くつもりでありましたのに、逆に主イエスによって裁かれています。つまり被告席に立つ主イエスが神の子としてイスラエルの民の代表者であるアンナスを裁いておられるのです。

もともとこの裁判は、アンナスの義理の息子でその年の大祭司であったカイアフアが発案したものでした。彼は、「一人の人間が民の代わりに死ぬ方が好都合である」といって、主イエス殺害を合法的に企てたわけです。その意味で、この裁判は虚偽に満ちた裁判です。しかし主イエスはその法廷に立って、真の裁判を行っておられるのです。

II

その上で、主イエスはさらに言葉を継いで「わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている」

というのです。

わたしたちは、このような主イエスの言葉を、どのように聞くのでしょうか。主イエスは不親切だ、というような感想が聞こえてきそうな気がします。

しかし主イエスは、ここで、御自分の教えを一から話すのが面倒だから拒否しているといったことはありません。そうではなく、主イエスは、神の子として父なる神から聞いたことを弟子たちに語りました。そして弟子たちは、その主イエスから聞いたことを、さらに人々に告げるのです。そのような「神の言葉の秩序」を立てつつ、主イエスは伝道したのです。したがって今や、アンナスを始めとするユダヤ最高法院は、この神の言葉の秩序の外にある者たちであって、罪人であることが明瞭なのです。このようにして主イエスは、アンナスの法廷において、イスラエルの民の罪を明らかにしておられるのです。

III

ところでここに困ったことがあるのです。それは、今、神の言葉の秩序と申し上げましたが、その中で肝腎の「わたしが何を話したか」を知っているはずの弟子たちが、この法廷においては欠落しているということです。

それどこから、主イエスの話を一番身近に聞いたはずのシモン・ペトロは、何と、主イエスを知らないといって拒絶してしまうのです。

シモン・ペトロは、ゲッセマネの園における主イエス逮捕劇の中で、いわば徹底抗戦を試みました。「シモン・ペトロは剣を持っていたので、それを抜いて大祭司の手下に打ってかかり、その右の耳を切り落とした」のです(ヨハネ 18:10)。もちろん自分にとって大切な師である主イエスを守りたいとの一心から出た行動です。しかし主イエスは、その直前に、ユダヤ当局が派遣した人々に向かって、「わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい」と命じておられます(ヨハネ 18:8)。主イエスは弟子たちに、彼らを守るために、去るように命じてもいます。この主イエスの御心に逆らって、自分の情熱のままに行動したのがペトロでした。彼は、その自分の情熱のままに、主イエスが人々によって連行される後を追って、大祭司の屋敷の中庭に入ったわけです。もちろん何かあれば、主イエスを助けるために行動を起こすつもりだったのでしょう。

この時、聖書は実に冷静に次のように告げています。ペトロともう一人の弟子が、大祭司の屋敷まで行くのですが、「この弟子は大祭司の知り合いだったので、イエスと一緒に大祭司の屋敷の中庭に入ったが、ペトロは門の外に立っていた」というのです。つまり自分の情熱のままに、主イエスの後を追ってきたペトロは、そこでストップを食らうのです。しかし「大祭司の知り合いである、そのもう一人の弟子は、出て来て門番の女に話し、ペトロを中に入れた」というのです。したがってこの門番の女は、あ

る程度事情を知っていたことになります。ですから彼女が「あなたも、あの人の弟子ではありませんか」といったとき、ごく確認のために言ったに過ぎません。しかしペトロは、何故か、主イエスを助けたいと思ってここまで来たのに、「違う」といってしまうのです。つまり主イエスを助けたいという情熱、さらに自分は他の弟子たちと違って主イエスに従うという意志は、ここで簡単に、折れてしまっているのです。

ですからこの後、主イエスがアンナスの法廷から出てきて、大祭司カイアファのところへ連行されるさい、他の人々がペトロに、「お前はあの男の弟子の一人である」と二度、言うと、ペトロは、その都度、主イエスを知らないといってしまうのです。

ここから明らかになることは、わたしたちは自分たちの情熱や意思の力で、主イエスが語ったことを聞き、またそれを証しすることは出来ないということなのです。この意味において、アンナスの下における法廷は、主イエスが主催する法廷であって、弟子たちの弱さの故の罪も明らかになるのです。

IV

そこで最後のことです。では、主イエスが言われたあの御言葉、「わたしが何を話したかは、それを聞いた人々に尋ねるがよい。その人々がわたしの話したことを知っている」と言う言葉は空しく終わるのでしょうか。そうではありません。主イエスのこの御言葉は、「神の言葉の秩序」を示すものであって、主イエス御自身がそれを実現し、全く新しく証し人を生み出すのです。

そのために主イエスは、アンナスの法廷という偽りの法廷に立ち続け、人間の罪を背負っておられるのです。わたしたち人間は、アンナスのように、またペトロのように自分中心の思いに生きる罪人に他なりません。そのような罪人を救い出すために、主イエスは今罪を負う方として裁かれる被告席に立ち続けておられるのです。

わたしたちは、このような主イエスの救いによって、あの「神の言葉の秩序」の中に招き入れられ、主イエスの言葉を聞き、それを証しする者とされるのです。

(2025年5月4日(日)主日礼拝説教)

主の昇天の恵みーペンテコステを迎えるために

小野寺泉

はじめに

今年は6月8日がペンテコステ（聖霊降臨）です。その備えとして、昇天について学びたいと思います。

主イエスは、復活した後、弟子たちの間に40日に渡って現れました（使徒1:20、Iコリ15:3～8）。そして聖霊降臨の前に、父なる神の身許に昇天され、神の右の座に着座されました。その上で、主イエスは聖霊を注いでおられます（使徒2:33）。昇天は、明らかにイースターとペンテコステの間にある出来事です。この恵みを受け止めたいのです。

I

さて主イエスの昇天を語る代表的な記事の一つが使徒言行録にあります。

「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」（使徒言行録1章9節）

主イエスは弟子たちに聖霊の注ぎを約束した後、彼らの見ている目の前で、地から天へ上昇していったのです。

さらに続いて「イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。』」そのようにいわれています（使徒言行録1章10～11節）。この「白い服を着た二人」は明らかに神が遣わした天使のことです。それが一人ではなく、二人いるのは、彼らの証言が真実であること示すためです。彼らは、天を見つめる弟子たちに向かって、主イエスが再びおいでになる未来に目を向けるようにと告げました。明らかに今から、救いの完成という未来に向かって新しく始まる時があることを示しています。それは、主イエスの十字架と主イエスの再臨の間の「中間の時」であり、「教会の時」であるということです。その意味で、主イエスの昇天は、「教会の時の始まり」ということができます。

II

それにしても、主イエスが地から天にあげられるということをどのように考えたらよいのでしょうか。まるで空想科学小説のようにも感じます。

主イエスは死から復活されました。その復活の命は、わたしたちの自然な命と違っています。

わたしたちの自然な命は、この被造物の世界に属していて、いつも時間と空間に縛られ、時と所という枠組みの中にあります。たとえば、わたしたちには、教会にいながら、同時に家にいることはできません。家にいながら同時に教会にいるこ

とはできません。しかもわたしたち一人ひとは、別々に時間と空間の枠組みの中にいます。必ずそれぞれ個別的に時間と空間の中に生きています。そしてそのような時間と空間の枠組みの中で一人ひとり死んでいくのです。

けれども主イエスの復活の命は、そのような被造物の世界の時間と空間の枠組みに縛られているわけではありません。死から復活されたからです。それは、最早、自然の命のように時間と空間に縛られているのではなく、そこから自由に存在する命です。そのため主イエスは、エマオ村で弟子たちと食事をしているとき、弟子たちが主イエスであると分かったので見えなくなります。時間と空間から自由な命であることを示されたのです（ルカ24:31）。また同じ頃、エルサレムで主イエスはペトロに復活の御自身を示したり（ルカ24:34）、あるいは弟子たちが、ユダヤ人たちを恐れて鍵をかけて家の中にひそんでいると、突然、彼らの真ん中に現れるのです（ヨハネ20:19）。これらは復活の主イエスの命は、最早、この世の時間と空間に縛らず自由な存在であることを証しています。それは、主イエスの遍在といってよいのです。

III

しかし主イエスは、そのようにして復活のお姿を弟子たちに姿を現して終わりではありません。主イエスは、父なる神の御心によって復活したなら、その先にまで進んでいけます。それは、復活の主イエスが父なる神との交わりにおいて一人の神として、救いを弟子たちばかりでなく、他のイスラエルの民にも、また異邦人にももたらすことにあります。言い換えると、御父と御子の交わりにおいて一人の神として、救いによる御支配を全世界にもたらすことにあります。

そのため主イエスは、父なる神の右に上げられ、神から聖霊を受け、それを弟子たちに注ぎ教会をお建てになるのです。それは、建物の話ではなく、主イエスの復活の証人たちの証によって、主イエスが今も生きてこの世界を支配してくださっている幸いを明らかにすることにあります。

そのような御業のために、復活の主イエスは父なる神のみ許に行かれるのです。そのことを使徒言行録は、地から神がいます「天に上げられる」と告げているのです。

IV

以上から昇天の恵みは、主イエスの救いの拡充であり徹底化です。父なる神と共に救いによる神の御支配を全世界にもたらすことであり、その救いを指し示すために教会を建てる事です。そのようにして主イエスは、救いの完成の時に至るまで、「教会の時」を開始してくださるのです。わたしたちは、今、その時の中で生かされています。

I. 4月の教会の歩み

4月2日(水)	聖書を学び祈る会
4月5日(土)	定期委員会 礼拝準備会①②
4月6日(日)	主日礼拝 聖餐式執行
4月9日(水)	受難週特別祈禱会その1
4月12日(土)	礼拝準備会③
4月13日(日)	主日礼拝 代読:委員田畑 受難週特別祈禱会その3
4月16日(水)	受難週特別祈禱会その2
4月17日(木)	求道者のための読書会
4月19日(土)	イースターエッグ・しおり・プレゼント等の準備
4月20日(日)	イースター礼拝 イースター祝会
4月21日(月)	求道者のための読書会
4月23日(水)	聖書を学び祈る会
4月27日(日)	主日礼拝 月報『ともしび』発行
4月30日(水)	聖書を学び祈る会

◆4月の集会統計 (平均人数、備考欄は延べ人数)

	男	女	計	備考
主日礼拝	2.5	5.8	8.3	求道者:2 他教会:6
祈る会(昼)	2.0	0	2.0	求道者:1
祈る会(夕)	1.2	1.0	2.2	他教会:1
入門講座	-	-	-	
讃美歌練習	-	-	-	

II. 主な決議事項

1) 2025年5月礼拝説教箇所・各礼拝奉仕者について、
 以下のように決めた。

日	聖書箇所	説教者	報告者	奏楽者	献金	受付
1	ヨハネ18:28～19:16	小野寺泉	宮川美加	宮川美加	宮川美加	田畑有希子
8	使徒2:1～42	小野寺泉	宮川美加	宮川美加	田畑有希子	杉山綾子
15	創世記1:24～31	宮川美加	杉山綾子	杉山綾子	杉山綾子	田畑有希子
22	出エジプト19:1～25	小野寺泉	田畑有希子	田畑有希子	宮川美加	杉山綾子
29	出エジプト20:1～21	小野寺泉	杉山綾子	杉山綾子	田畑有希子	宮川美加

6月 聖餐式奉仕者 パン:宮川美加 杯:田畑有希子

2) ペンテコステ礼拝

6月8日(日)
 使徒言行録2章1～42節
 「キリストの民の誕生」

3) 6月15日(日)美深伝道所応援

礼拝説教の代読は、委員宮川美加が担当する。
 ・礼拝準備会 10日(火)、12日(木)、14日(土)

III. 4月の教会会計報告

収入の部			支出の部	
科目	金額		科目	金額
献金	1.礼拝献金	41,504	1.礼典費	537
	2.維持献金	90,000	2.基本謝儀	210,900
	3.感謝献金	284,500	3.研究費	14,000
	4.供出献金	26,000	4.特別謝儀	-
	5.特定献金	76,000	◆小計	224,900
	6.会堂営繕	10,000	5.伝道費	-
補助	◆小計	528,004	6.日曜学校費	-
	7.中会補助	-	7.諸集会費	778
	8.伝道補助	-	◆小計	778
その他	◆小計	-	11.光熱水費	79,816
	12.牧師館費	10,000	12.通信費	14,463
	13.雑収入	-	19.厚生費	32,263
	14.預り金	35,521	23.会堂建築積立	-
大・中会個人献金	◆小計	45,521	24.会堂営繕積立	-
	16.中会受難週	14,500	25.退職積立	-
	17.中会教職B	500	◆小計	126,542
	18.中会ヤスクニ	1,000	29.預り金(社保)	31,471
	19.中会秋伝道	1,500	30.予備費	7
	20.大会伝道局	1,500	◆小計	31,478
	21.大会ペンテ	-	36.日曜学校日	-
	22.大会共助B	3,000	40.中会受難週	-
大・中会	◆小計	22,000	◆小計	-
	◆当月収入計	595,525	◆当月支出計	384,235
◆前月繰越金		△61,865	◆次月繰越金	149,425
合計		533,660	合計	533,660

【維持献金】東真紀子(4)、杉山綾子(4)、田畑有希子(4)、平間早苗(3・4)、宮川美加(4)、本間一美(4)【会堂営繕】杉山綾子(4)、田畑有希子(4)、平間早苗(3・4)、宮川美加(4)、本間一美(4)【供出金】田畑有希子、本間一美【感謝】東真紀子、杉山綾子、田畑有希子、小野寺泉、鈴木茂夫、川端起代子、匿名(※西宮中央教会員より匿名の感謝献金)【特定献金(イースター)】東真紀子、杉山綾子、田畑有希子、平間早苗、宮川美加、小野寺泉、鈴木茂夫、本間一美、小野寺和子、狭間さん家族【中会受難週】東真紀子、杉山綾子、田畑有希子、宮川美加、小野寺泉、鈴木茂夫、本間一美【中会教職B】田畑有希子【中会ヤスクニ】田畑有希子【中会秋伝道】田畑有希子【大会伝道局】田畑有希子【大会共助B】田畑有希子

《編集後記》

◆六月には、例年になく暑い日が続いた。またエゾ梅雨のような時期もあった。月の連休には、札幌琴似教会には森下真裕美牧師が、札幌発寒教会には森下一彦牧師がそれぞれ就職された。就職式における誓約では、これから招聘した牧師から御言葉を聞くという決意が見られたように思った。この一対一の招聘関係は重要である。◆では、招聘関係を尊重しつつ、一人の牧師が複数の群れに仕えるというのは、どのように可能であるのだろうか。◆前提の一つは、牧師とは、わたしたちが招聘したわたしたちの群れの先生である前に、「御言葉の役者」に他ならないということにある。一つ一つの群れは、ただ神の言葉によってのみ養われていくということを願って牧師招聘をしたはずだからである。◆もともと主イエスの主権が明らかにされるのは、神礼拝にある。それは、驚くべき神の恵みの出来事である。神の敵であるはず罪人が、神を心から賛美

し感謝するからである。この出来事を引き起こすのが
主イエスであり、この方に仕えてなされる説教である
(泉)